

レビ記4章「罪の清め」

1A 聖所への血 1-21

1B 大祭司の罪 1-12

1C 流される血 1-7

2C 焼かれる体 8-12

2B 会衆すべての罪 13-21

2A 祭壇への血 22-35

1B 族長の罪 22-26

2B 民衆の罪 27-35

1C やぎ 27-31

2C 羊 32-35

本文

レビ記4章を開いてください。私たちは、レビ記について、いろいろないけにえ、またささげ物について学んでいます。主の聖さにあずかるために、どのようにして生きていけばよいのかを、いけにえを通して見ていっています。初めに、全焼のいけにえでした。キリストが私たちのために、ご自身のすべてを、いのちに至るまでお献げになりました。そこある神の憐れみによって、私たちが自分自身のすべてを明け渡すのです。そこには、屠られた牛や羊の血が祭壇の側面に注がれます。キリストの流された血によって贖われていることを示しています。

次に、全焼のいけにえに供えるようにして、穀物のささげ物についての教えがありました。全焼のいけにえが、キリストの死に至るまでの姿を表しているならば、穀物のささげ物は、主のいのちを示しています。主は死なれ、すべてを献げ、献げたからこそ、よみがえりのいのちがあります。私たちも、キリストにあって自分に死んでいる中で、キリストが私たちの内に生きてくださるのです。

そして、交わりのいけにえ、あるいは平和のいけにえがありましたね。そのいけにえの特徴は、全てを焼かないことです。脂肪と腎臓のところだけを祭壇に献げ、残りの肉は祭司が食べ、また民が食べるのです。そこにあるのは、交わりにある喜びです。いけにえを、豊かさを示す脂肪分のところを主が食べ、残りを私たちが食べることによって、神と交わり、互いに交わっています。そこにある平和の豊かさを味わっています。

そして、4章と5章も、いけにえの教えがあります。けれども、これまでのと違う種類のいけにえです。これまでのいけにえは、自ら進んで献げるものです。日本語の聖書には上手に訳されていませんが、「自ら進んで」という言葉が、いけにえを献げるところに出てきます。主のしてくださった

ことに、その憐れみに応答して、主に明け渡して従って行こうであるとか、主の招いてくださる豊かな交わりに自分が思い切って入っていくであるとか、それは主体的に、自発的に献げていくのです。自発的だからこそ、いけにえがいけにえとして意味をなします。

けれども、4章と5章は違います。4章は、「罪のきよめのいけにえ」について書いてあります。5章には、「代償のいけにえ」が書いてあります。罪を犯したことで人に過失を与える時の代償としての、いけにえです。いわゆる罪過ですね。罪や罪過についてのいけにえは、献げても、献げなくてもいいよ、というものではありません。救われ、主を知った者たちが罪を犯す時に、それを清めていただいてもいいけれども、そうしなくてもいいよ、ということではありません。罪があると、私たちと神との交わりが途切れてしまうのです。ですから、しなければいけないことなんです。

ここで大事なものは、レビ記というのは、すでにシナイの荒野のホレブの山にて、そこにある幕屋から主が語られていることです。つまり、エジプトから連れ出されて神の民になっている中で、語られていることです。これから救われるために罪の清めをいただくのではなく、救われた者であっても、罪を犯してしまうことについて扱っています。神の憐れみを受けて、全焼のいけにえ、穀物のささげ物、交わりのいけにえを献げている者たちが、それでも罪を犯してしまう時に献げるものです。

そのことを、ヨハネは第一の手紙で語っていますね。「1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」これは、神との交わりを持っている人です。けれども、神との交わりを持っていながら、以下の罪の告白をヨハネは説いています。「1:8-10 もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。もし罪を犯したことがないと言うなら、私たちは神を偽り者とすることになり、私たちのうちに神のことはありません。」この、罪の告白について、私たちの罪を赦して、不義から清めてくださる神の働きを、罪のきよめのためのいけにえから、学んでいきたいと思えます。

1A 聖所への血 1-21

1B 大祭司の罪 1-12

1C 流される血 1-7

¹主はモーセにこう告げられた。²「イスラエルの子らに告げよ。人が、主がしてはならないと命じたすべてのことから離れて、気づかずに罪に陥り、その一つでも行ってしまった、以下のような場合には――

ここで大事な言葉は、「気づかずに罪に陥り」という言葉です。罪のきよめについて、それは故意ではなく、気づかずに犯した罪だということです。ただ、これは、必ずしも情報としての知識がなか

ったということではなく、気づかなかったと言ったほうが良いでしょう。使徒パウロは信仰を持つ前は教会の迫害者でしたが、「Ⅰテモ 1:13 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。」と告白しています。イエス・キリストについては、噂や他の使徒たちの宣教によって情報としては知っていましたが、イエスに人格的に知らなかったのです。この方に、真理があることに気づいていなかったのです。私たちが、聖書によって、神とイエス・キリストの知識を増し加える時に、自分の意識では罪だと思っていなかったことが、実はとんでもない罪であることが心の中で明らかにされることです。

もう一つは、良心が弱まって、鈍くなってしまうて犯した罪の事です。ダビデが犯した罪がそうです。バテ・シェバがウリヤの夫であることを知りながら、彼女を呼び寄せ寝ました。そのため彼女は子を宿しました。そして、ウリヤを殺しました。それをナタンが、喩えを使って指摘します。貧しい人には雌の子羊を、富んだ人が奪ったという話ですが、彼は死罪に値するとダビデは断罪しましたが、ナタンは、「あなたはその男です」と指摘しました。それで、ダビデは、「私は主の前にある罪ある者です。」と告白しました。(Ⅱサム 12:7,13)これもまた、気づかずに犯した罪です。良心が鈍り、その中で犯した罪でした。そして彼は、主に罪を言い表しています。

では、気づかずに犯した罪ではなく、故意に犯す罪とは何でしょうか。民数記 15 章に、罪のためのいけにえをささげなさいという命令がありますが、もしいけにえを携えるのを拒むときに、それが故意に罪を犯していることであると定義しています。「民 15:30 この国に生まれた者でも、寄留者でも、故意に違反する者は【主】を冒す者であり、その人は自分の民の間から断ち切られる。」誤って犯した罪のために、主は罪のためのいけにえをもって罪を赦す備えを与えてくださったのに、それさえも拒めば、それは民から絶たれることになる、つまり滅びることになります。

ヘブル人への手紙 10 章にも、故意に犯す罪が述べられています。「10:26-29 もし私たちが、真理の知識を受けた後、進んで罪にとどまり続けるなら、もはや罪のきよめのためにはいけにえは残されておらず、ただ、さばきと、逆らう者たちを焼き尽くす激しい火を、恐れながら待つしかありません。モーセの律法を拒否する者は、二人または三人の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死ぬこととなります。まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。」故意に、ことさらに罪を犯すということは、神の御子を踏みつけること、契約の血を汚れたものとみなすこと、恵みの御霊を侮ることです。罪を犯して、それでキリストの十字架のところまで来なさい、という呼びかけを受けているのに、「いや、私はこれから自分自身の道を歩みます。キリストによる罪の贖いは必要ありません。そんないけにえで、私自身を煩わせようとは思いません。」というのが、故意に罪を犯すことです。罪を犯したことにさいし、キリストの贖いを拒むことです。

³油注がれた祭司が罪に陥って、民が責めを覚える場合には、その祭司は自分が陥った罪のために、傷のない若い雄牛を罪のきよめのささげ物として主に献げる。

気づかずに犯した罪について、祭司が罪に陥った場合について、主は教えています。この後、13 節からは、民衆すべてが罪を犯した時のことを教えています。この二つは、同じようにいけにえを献げます。若い雄牛を献げます。それから、22 節以降で、族長一人が犯した罪、そして民衆の一人が犯した罪について主は語られます。そこではやぎを献げます。後半の一般の人たちが犯した、個々の罪よりも、ここの祭司の犯した罪と、民衆が全体として犯した罪のほうが、主の前で重い、深刻であることが分かります。イエス様は、「多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。(ルカ 12:48)」と言われました。

⁴ 彼はその雄牛を会見の天幕の入り口、主の前に連れて行き、雄牛の頭に手を置き、主の前でその雄牛を屠る。⁵ その油注がれた祭司はその雄牛の血を取り、それを会見の天幕に持って入る。⁶ その祭司は指を血に浸し、主の前で、聖所の垂れ幕に向けてその血を七度振りまく。

頭に手を置いて、それを屠るところまでは全焼のいけにえと同じです。けれども、その血をそのまま祭壇に注ぐのではなく、会見の天幕、つまり聖所の中に携えていきます。そして初めに、垂れ幕の前で血を七度振りまくのです。祭司は、聖所の中で主に仕えます。主のご臨在の中で仕えます。その者が罪を犯したのですから、神の前に出て罪を清めていただくというのは、至聖所の前、つまり垂れ幕のところに出ることです。

預言者イザヤは、罪を犯すと、それは神との仕切りとなると教えています。「イザ 59:1-2 見よ。【主】の手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」会見の天幕に入るのにも幕の仕切りがあり、またその聖所の中に入っても、至聖所との間に垂れ幕があり、仕切りがあることに、すでに人には罪があり、栄光の神に近づけないことを示していますが、それでも、選ばれ聖別された祭司たちは、聖所の中まで入れているのです。その彼らが、罪を犯してしまったために、その仕切りの前でも罪の清めが必要だということなのです。

新約聖書では、私たち信じる者がすべて、霊の宮の中で神に仕える祭司であることを教えています。「I ペテ 2:4-5 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」私たちが主の前に出て礼拝を献げているながら、それで罪を犯しているならば、そこにおける傷と汚れは大きいものです。一般の人が犯している罪とは違います。聖なる主がおられる中で、犯しているからです。キリストが今は、その肉

体において垂れ幕になっておられます。キリストがその肉体において罪が処罰されたということを認めましょう。

⁷ 祭司はその血を、会見の天幕の中にある、主の前にある香り高い香の祭壇の四隅の角に塗り、その雄牛の血をすべて、会見の天幕の入り口にある全焼のささげ物の祭壇の土台に流す。

垂れ幕のところには、「主の前にある香り高い香の祭壇」があります。それは、いけにえを屠り、火で焼くところではなく、香を焚くための祭壇です。幕屋の入口にある青銅の祭壇もそうですが、その四隅は牛の角を模しています。角は、力と救いを表しています。そこに血を塗ることによって、力と救いのある主ご自身に、その罪を赦していただくことです。その罪の赦しによって、力をもって救ってくださいます。つまり主は、十字架で血を流された時に、その力は悪魔の支配を打ち破り、私たちに救いをもたらしてくださいます。

そして、香壇は「主の前にある香り高い香」であるとありますが、聖書では、香は主に対する祈りとして捉えられています。「詩 141:2 私の祈りが御前への香として手を上げる祈りがタベのささげ物として立ち上りますように。」黙示録でも、天における香は聖徒たちの祈りとあります。「8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。」したがって、香壇に血が塗られるということは、その祈りが罪によって妨げられているので、それを清めなければいけないということです。聖徒たちにとって、霊の祭司としての大きな働きが、祈りです。それが妨げられます。「詩 66:18 もしも不義を私が心のうちに見出すなら主は聞き入れてくださらない。」それゆえ、私たちが罪を犯した時、すべての祈りの前に献げるべき祈りは、罪の告白の祈りです。先ほど読んだ、第一ヨハネのように、罪を言い表したら、罪を赦し、すべての不義から清められます。

そして、残りの血は、入口の青銅の祭壇のところに流します。ここで大きな違いがあります。全焼のいけにえと交わりのいけにえは、祭壇の側面に血を振りかけていました。ここでは、祭壇の土台に流します。これは、私たちが主に献げる、また交わることに於いて、御子の血が流されていることによって交われますが、罪を犯した時は、その血が角に塗ることによって用を足します。それで、土台に注いで処理をするのです。

2C 焼かれる体 8-12

⁸ そして、罪のきよめのささげ物であるその雄牛の脂肪をすべて取り除く。すなわち、内臓をおおう脂肪と、内臓に付いている脂肪すべて、⁹ また、二つの腎臓と、それに付いている腰のあたりの脂肪、さらに腎臓とともに取り除いた、肝臓の上の小葉を取り除く。¹⁰ これは交わりのいけにえの牛から取り除く場合と同様である。祭司はそれらを全焼のささげ物の祭壇の上で焼いて煙にする。

祭壇の上で焼くのは、交わりのいけにえの時と同じです。脂肪の部分や腎臓です。しかし、残り

の部分がかん異なります。

¹¹ その雄牛の皮とそのすべての肉、頭と足の部分、さらに内臓と汚物、¹² すなわちその雄牛の残りすべてを、宿営の外のきよい所、すなわち灰捨て場に運び出し、薪の火で焼く。これは灰捨て場で焼かれる。

他はすべて、宿営の外に持ってってしまうのです。それはなぜか？罪を犯した肉であるから、その罪から離れるために宿営から離れたところで焼きます。そしてこれは、実にイエス・キリストご自身についての預言です。ヘブル書 13 章 10-12 節を開いて見ましょう、「私たちには一つの祭壇があります。幕屋で仕えている者たちには、この祭壇から食べる権利がありません。動物の血は、罪のきよめのささげ物として、大祭司によって聖所の中に持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるのです。それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。」

今日エルサレムの町に行くと、キリストが十字架につけられた可能性のある所が二つあります。一つは聖墳墓教会、もう一つは「ゴードンのカルバリ」とも呼ばれる「園の墓」です。聖墳墓教会は旧市街の中にあります。今のエルサレムの城壁はオスマン・トルコ時代に作られたものであり、当時は城壁の外にありました。ですから、どちらもエルサレムの外に存在し、主は確かに神の御名がおかれているエルサレムから引き離されて、呪われた者とされたのです。

祭司が罪を犯した時に、その罪の清めに、イエス・キリストが罪のための死なれたことが直接、投影されているのです。垂れ幕も、十字架の付けられた時に上から下に引き裂かれて、ヘブル書では垂れ幕はキリストの肉体であると書かれています。したがって、そこで主が、肉が裂かれて、血が流されて、祈られた祈りはすべて私たちのためであることを知ることです。

2B 会衆すべての罪 13-21

¹³ イスラエルの会衆すべてが迷い出て、すなわち、あることがその集会の目から隠れていて、主がしてはならないと命じたすべてのことのうち一つでも行い、後になって責めを覚える場合には、¹⁴ 自らの罪が明らかになったときに、その集会の人々は罪のきよめのささげ物として若い雄牛を献げ、それを会見の天幕の前に連れて行く。¹⁵ 会衆の長老たちは主の前でその雄牛の頭に手を置き、主の前でその雄牛を屠る。

祭司の次は、会衆すべてが迷い出ていたことです。ちょうど分かりやすくするなら、教会全体で犯していた罪が発覚したということになります。祭司が犯す罪が清められないと、礼拝が献げることが出来なくなるのと同じように、会衆全体が罪を犯していればこれは全体で悔い改めなければいけません。それで、代表である長老たちが、祭司の時と同じように若い雄牛の頭に手を置いて、

それで、主の前で屠ります。

教会が全体として、悔い改めなければいけないことがあります。ペテロは、第一の手紙で「4:17 さばきが神の家から始まる時が来ているからです。」と言いました。世を神が裁かれるのですが、その裁きは神の家から始まります。ですから、私たちは眠るのではなく、目を覚ましていなければいけません。

¹⁶ 油注がれた祭司は、その雄牛の血を会見の天幕に持って入る。¹⁷ 祭司は指を血に浸し、主の前で、垂れ幕に向けてその血を七度振りまく。¹⁸ そして、その血を会見の天幕の中にある主の前の祭壇の四隅の角に塗る。また、その血はすべて、会見の天幕の入り口にある全焼のささげ物の祭壇の土台に流す。

垂れ幕のところで血を七度、振りまくことも、また金の香壇の角の四隅に塗ることも、祭司の罪を清めていただくのと同じです。

¹⁹ 脂肪はすべてその雄牛から取り、祭壇の上で焼いて煙にする。²⁰ 罪のきよめのささげ物の雄牛に対してしたように、この雄牛に対して行う。こうして祭司は彼らのために宥めを行う。そして彼らは赦される。²¹ その雄牛は宿営の外に運び出し、先の雄牛を焼いた場合と同様に、それを焼く。これは集会のための罪のきよめのささげ物である。

肉や汚物その他のものをすべて、宿営の外で焼くことについても、祭司の時と同じです。

2A 祭壇への血 22-35

1B 族長の罪 22-26

²² 族長が罪に陥って、その神、主がしてはならないと命じたすべてのうちの一つでも、気づかずに行ったが、後になって責めを覚える場合、²³ または、自分が陥っている罪が知らされた場合には、ささげ物として傷のない雄やぎを連れて来る。

ここからは、一般の人々の個々の罪のきよめです。ここでは族長が罪に陥った場合です。霊的な事柄ではなく、政治や行政面における首長のことです。いけにえの動物が雄牛から雄やぎに変わりました。それだけ責任の重さが相対的に軽くなった、ということです。政治指導者が犯す罪と、霊的な指導者が犯す罪とでは、後者のほうを神は深刻に考えておられることを知ってください。十字架刑を下そうとしているローマ総督ピラトに対して、イエス様は、「ヨハネ 19:11 ですから、わたしをあなたに引き渡した者に、もっと大きな罪があるのです。」と言われました。

私たちは、政治家などが行う悪いことについては、簡単に非難することができますが、難しいの

は、自分たちのこと、霊的な共同体、教会のほうです。主は、社会に、政治に何かが起こっている時に、世直しを求めるよりも、教会の刷新を願っておられます。そうしたことを通して、教会に主が語っておられることが多いのです。

²⁴ そして、そのやぎの頭に手を置き、全焼のささげ物を屠る場所で、主の前でそれを屠る。これは罪のきよめのささげ物である。²⁵ 祭司は罪のきよめのささげ物の血を指に付け、それを全焼のささげ物の祭壇の四隅の角に塗る。残りの血は全焼のささげ物の祭壇の土台に流す。²⁶ また、交わりのいけにえの脂肪の場合と同様に、その脂肪はすべて祭壇の上で焼いて煙にする。こうして祭司は彼のために、罪を除いて宥めを行う。そして彼は赦される。

いけにえの血は聖所の中の香壇の角に塗るのではなく、青銅の祭壇の角に塗ります。祭司や、イスラエルの家のような礼拝共同体ではなく、一般の事柄なので、青銅の祭壇の上で済ませます。そして肉についてですが、外に捨てるのではなく祭司が食べることになります。「6:25-26 アロンとその子らに告げよ。罪のきよめのささげ物についてのおしえは次のとおりである。罪のきよめのささげ物は、全焼のささげ物が屠られる場所、【主】の前で屠られる。これは最も聖なるものである。罪のきよめのささげ物を献げる祭司はそれを食べる。それを聖なる所、会見の天幕の庭で食べる。」祭司が、その族長のために執り成して祈っているのです。

祭司自身が罪を犯した場合は仲介者がいなくなりますが、ここでは祭司自身が仲介を果たすことができます。そして、はっきりと「罪を除いて宥めを行う。そして彼は赦される」とあります。正しい神の前に出ても、罪がきよめられています。赦されています。このことによる解放は、どれほどうれしいことでしょうか！

2B 民衆の罪 27-35

1C やぎ 27-31

²⁷ 民衆の一人が、主がしてはならないと命じたことの一つでも行って、気づかずに罪に陥ってしまったが、後になって責めを覚える場合、²⁸ または、自分が陥っていた罪が知らされた場合には、その人が陥っていた罪のために、ささげ物として傷のない雌やぎを連れて来る。

民衆の一人の場合は、族長よりもさらに、責任の重さが少なくなります。族長は雄やぎでしたが、民衆は雌やぎを連れてきます。

²⁹ そして、その罪のきよめのささげ物の頭に手を置き、全焼のささげ物の場所で罪のきよめのささげ物を屠る。³⁰ 祭司はその血を指に付け、それを全焼のささげ物の祭壇の四隅の角に塗る。その血はすべて祭壇の土台に流す。³¹ 交わりのいけにえから取り除かれる場合と同様に、その脂肪はすべて取り除く。祭司は主への芳ばい香りとして、それを祭壇の上で焼いて煙にする。こうして

祭司はその人のために宥めを行う。そして彼は赦される。

この手順は、族長の時と同じですね。罪のきよめのため、その血を祭壇の角に塗ります。それから、残りの血を土台に注ぎます。それから、いけにえは脂肪と腎臓の部分は祭壇で焼きます。けれども、肉は祭司が受け取ります。

そして、ここでは、「主への芳ばしい香り」とまで出てきます。これまで、罪のきよめのためのいけにえでは、出て来なかった言葉です。これは、罪が赦し、その人を受け入れることを主が喜んでおられることを示しています。私たちは日々、その罪の清めと、主が赦し、受け入れてくださったことを確認して生きて行きたいですね。

2C 羊 32-35

³² 罪のきよめのささげ物のために、ささげ物として子羊を連れて来る場合には、傷のない雌羊を連れて来る。

やぎだけでなく、子羊も雌羊であれば受け入れられます。

³³ その罪のきよめのささげ物の頭の上に手を置き、全焼のささげ物を屠る場所で、罪のきよめのささげ物としてそれを屠る。³⁴ 祭司は罪のきよめのささげ物の血を指に付け、それを全焼のささげ物の祭壇の四隅の角に塗る。その血はすべて祭壇の土台に流す。³⁵ また、交わりのいけにえの子羊の脂肪が取り除かれる場合と同様に、その脂肪はすべて取り除く。祭司はそれを祭壇の上で、主への食物のささげ物の上に載せて、焼いて煙にする。こうして祭司は彼のために、陥っていた罪を除いて宥めを行う。そして彼は赦される。

やり方は、やぎの時と同じですね。

これで私たちは、罪のためのいけにえを見ました。主との交わりを回復するのに、手を頭に載せること、つまり罪の告白が必要です。そして血があてがわれることが必要です。イエス様の流される血です。それで、主が快く受け入れてくださいます。指導的な役割ほど、その罪は深刻です。そして、一般の人よりも、神の家における罪は深刻です。主は、私たちに聖なる者として歩むために、罪に対する対処を軽んじない、ということです。